

黒川文庫蔵『小督物語』解題・翻刻・影印

渡邊 亜紀

『小督物語』は、松本隆信『増訂室町時代物語現存本簡明目録』に収められ、『祇王』『横笛草子』『大原御幸の草子』などと同様に『平家物語』に取材した女人説話の、室町物語である。

本書は黒川真道の手による大正六年の新写本である。その奥書を記せば、次の通りである。

此の小督物語は上巻はかりなり零本といへとも写しおきぬ

他日全本を得たらん時はまた参考ともならんとおもへはなり

大正六年五月 黒川真道識

このように、本書は下巻を欠いた零本だが、親本の所在が不明なうえに他に伝本の所在を聞かない孤本である。また、未翻刻・未影印の資料であるので、ここに紹介するものである。

梗概を次に記す。

後白河の皇子高倉帝が恋慕の思いに沈んでいたので、中宮より桜町中納言しけのりの娘で禁中一の美人にして琴の

上手である小督という女房を送られる。小督は冷泉の大納言みちふさが少将の頃相思相愛であった仲である。みちふさは帝へ上がった小督への恋慕を訴えるが、小督は退ける。入道相国清盛は二人の婿を虜にした小督を激怒する。それを知った小督は密かに宮中を出奔する。小督失踪後の主上の悲嘆はこの上ない有様である。入道が召使いの伺候さへ阻止したため主上はいっそう小督追慕の情を増してゆく。ある夜主上は宿直の弾正の大弼なか国に、嵯峨野に隠棲しているという小督の探索を命じる。笛の名手であったなか国は、小督の琴の音を標に探索の決意をする。寮の馬を賜ったなか国は嵯峨野を小督の爪音を求めて彷徨う。龜山あたりでなか国は「想夫恋」の爪音に小督であることを確信して、琴に横笛を吹き合わせて来訪を告げる。

このように、『小督物語』は内容的に、『平家物語』諸本における「小督」譚の前半部に重なる。^{注1}そして、その本文は、読み本系諸本に比して、語り本系諸本のそれに近い。語り本系諸本間における『平家物語』「小督」譚の比較においては、同一本文の箇所が少なくはない。しかし、^{注3}巻の位置から生ずる異同を除いたうえで、『小督物語』と語り本系諸本とを細かな語句レベルの差異にも注目して比較すれば、『小督物語』は全体として、^{注4}語り本系諸本中最も古態を有しているといわれる屋代本よりは、後出とみられる一方、八坂系の本文の影響を受けているようである。

高倉天皇が仲国に対して小督への恋慕の情を訴える場面を例にして、一方本、八坂本と、『小督物語』を比較しよう。^{注5}まず一方本と八坂本を以下に示す。なお、一方本には覚一本を使用する。

…かくて八月十日あまりになりけり。さしもくまなき空なれど、主上は御涙にくもりつ、月の光もおほろにぞ御覽せられける。や、深更に及んで、「人やある、く」と召されけれども、御いらへ申ものもなし。弾正少弼仲国、其夜しも御宿直に参つてはるかにとをう候が、「仲国」と御いらへ申たれば、「ちかう参れ。仰下さるべき事あり」。何

事やらんとて御前ちかう参したれば、…(寛一本)

…頃は八月十日余りのことなれば、さしもくまなき空なれ共、御泪にくもりて月の光そ臙なり。主上「人やはく」と仰けれ共、おいらへ申者もなかりかるに、や、あつて、彈正の大弼仲国、其夜しも御前にちかふ御宿直申て候らひけるが、「仲国」とおいらへ申て参りたり。「いかに仲国ちかふ参れ、仰合すへき事あり」と仰ければ、仲国御前ちかふそ参りたる。…(八坂本)

次に、寛一本、八坂本と、『小督物語』を比較してゆくが、ここでは、『小督物語』本文に傍線を付すという形式で表す。そこで、一方本に近い本文を——、八坂本に近い本文を……、両本に共通する本文を……によつて示せば、以下の通りである。

…ころは八月十日あまりの事なれば、さしもくまなき空なれとも主上はおもふにたえかね、御涙にくもらせ給ひて、さやけき月のひかりもおほろにして御らんせられける。ひころはしいかくわんけんさまくの御ゆうらんありしかとも、た、ひとりつくくとおはしましたける。や、しんかうにおよんで「人やあるく」とめされけれども、御いらへ申ものもなし。

恋詫てひとりふせやに夜もすがら

おつる涙やをとなしの滝

や、ありて、たんしやうの大ひつ仲国、そのよおりしも御とのゐにまいつて、はるかにほととをく候ひけるが、「仲国これに候」と御いらへ申たてまつる。「なんちちかふまいれ。おほせくださるべきむねあり」と仰せければ、「何

事やらん」と思ひたてまつり、御まへちかふそ参しけり。…（『小督物語』）

*八坂本、および『小督物語』について、私に句読点などを加えている。

以上のことから、『小督物語』は、一方、八坂両流の本文に近いと思われるのである。

室町期以降の成立になると思われる当道系諸本をめぐっては、「取り合わせ本」とも呼ぶべき、複数本文を寄せ集めているものがあり、それらは『平家物語』諸本の流布状態を考える上で重要な課題を^{注6}はらむ」といわれる。『小督物語』の本文における現象は、そのような問題を考えるうえで、注目してよいであろう。

以上のように『小督物語』は、本文的に『平家物語』の影響の強い作品ではあるが、単なる切り接ぎの物語というわけではないようである。前述の傍線のない部分は平家諸本にはないからである。すなわち、

恋詫てひとりふせやに夜もすがら おつる涙やをとなしの滝

のように、清盛の横暴によって小督を失い伺候する者もない孤独のさなかに、「主上が和歌を詠む」という設定は、平家諸本には見られない。

このように、登場人物が場面に応じて詠歌するという設定において、『小督物語』の独自性を見ることができ、物語中の他の詠歌をあげれば、次のようになる。

① 高倉帝に召された小督が、少将みちふさとの別れを悲嘆しての詠歌。

君をわかおもふこゝろは大原や いつしかとのみすみやかれつ、

我恋はあひそめてこそまさりけれ しかまのかちの色ならねども

② 少将が、小督への未練の思いをその局に投げ入れて託した詠歌。

おもひかね心はそらにみちのくの ちかのしほかまちかきかひなし

③ ②を退けられた少将が、小督の前を退散するときの詠歌。

1 玉つさをいまは手にたにとらしとや さこそこゝろにおもひすつとも

2 くれなるに涙のいろも成にけり かはるは人のこゝろのみかは

④ 清盛に疎まれた小督が、内裏から出奔するときの詠歌。

別路の草葉をわけんたひころも たつよりかねてぬる、袖かな

⑤ 小督を失い失意の高倉帝が、南殿にて月の光に小督を思う詠歌。

1 涙さへ出にしかたをなかつ、心にもあらぬ月をみし哉

2 秋の夜の月にこゝろのあくかれて 雲るに物をおもふころ哉

⑥ 前述の高倉帝の詠歌。

⑦ 嵯峨野の小督探索を勅命された仲国が、池にて月光をめぐる詠歌。

行駒にかけをならへて廣澤の 池のおもてのつきそさ^{やか}へけし

これらの和歌のうち、②—1・③—1が『平家物語』諸本中^{注7}に載り、その他は『小督物語』だけのものである。

『小督物語』ではこのように、詠歌の設定、およびそれに付随した本文の加筆が、すべての登場人物の詠歌の場面で行われており、それが『小督物語』独自の特徴となっている。

これらのことから、『小督物語』には、たとえば近世初頭成立の仮名草子『薄雪物語』へと繋がるような和歌訓蒙書的な要素を見て取ることも、可能であろう。

いずれにせよ、本文的にはほぼ『平家物語』に拠りながら、『小督物語』は、『平家物語』『小督』譚の単なる模倣で終わらせることをせずに、和歌を増補するという方法を導入することで、物語草子としての文芸性の獲得を目指しているようである。

注

- 1 各諸本が卷六に「小督」を置くことに対して、屋代本のみ卷三に「小督」を位置づけている。
- 2 『平家物語』諸本における「冷泉隆房」の名を『小督物語』では「冷泉みちふさ」としている点は異なっている。
- 3 注1
- 4 渥美かをる氏、山下宏明氏など。
- 5 本文引用にあたっては以下のテキストを使用した。
覚一本：『平家物語』（新日本古典文学大系 岩波書店）
八坂本：『八坂本』（影印）（山下宏明解説 大学堂書店）
- 6 山下宏明『平家物語の生成』第二章当道系諸本の問題（昭和五九、明治書院）
- 7 典拠は藤原隆房『艶詞』であることが先学によって明らかにされている。

以下に書誌を示す。

「小督物語」(外題)

上巻一冊〔大正六年写〕 番号黒川214

表紙 原装本文共紙。(二十四・三×十六・六糎)

形態 仮綴(四つ穴)。

料紙 半紙。

見返し 後ろ見返しに奥書あり。備考参照。

外題 表紙左肩に「小督物語」と打付で墨書。

内題 なし。

本文 半葉十八字内外。漢字仮名交じり、読み仮名はなし。

丁数 全十五丁。

奥書 あり。備考参照。

印記 前表紙右上に円朱印「物語」、初丁オに単郭長方朱印「黒川真道蔵書」。

備考 上巻のみの零本であり、黒川真道による大正六年の新写本。後ろ見返しに「此の小督物語は上巻はかりなり零本

といへとも／写しおきぬ他日全本を得たらん時はまた参／考ともならんとおもへはなり／大正六年五月 黒川真道識」とある。

翻刻に際して、以下の方針をとった。

1 本文は底本に忠実であることに務めたが、漢字・異体字は現行の書体に改めた。

2 底本の見せ消ちや訂正文字はそのまま残しルビで示した。

3 底本の補入はそのまま残し―で示した。

4 底本の丁の末尾を「」で示した。

【翻刻】

小督物語

むかし後白川の院のわうし高くらの院と
申せしみかとは平家の大しやう大臣清盛
入道相国の御むこにておはしますいつの
ころよりかれんほの御涙におほしめししつ
ませ給ひたるを申なくさめまいらせん

とて中宮の御かたより小督と申女房を

「一〇

まいらせらるそもこの女房と申は桜町の
中納言しけのりのきやうのむすめ禁中

一のひしんならひなきことの上にてそ
まし／＼けるれんせいの大なこんみちふさ

のきやういまたせうしやうなりしとき

みそめたりしにうはうなりはしめは歌

「一ウ

をよみ文をはつくされけれども玉つさ

の数のみつもりてなひくけしきもなか

りしかさすか情によはるこゝろにやつみ

にはなひき給ひけりされとも今は君へめ

されまいらせてせんかたもなくなしく

もたえこかれあかぬわかれのなみたに

「二オ

や袖しほたれてほしあへす昼はひねも

すにせんさいをつく／＼となかめ夜はまと

るむひまもなくゑいし侍りし也

君をわかおもふこゝろは大原や

いつしかとのみすみやかれつゝ

我恋はあひそめてこそまさりけれ

〔2ウ〕

しかまのかちの色ならねとも

とさましくうちなかめ少しやういかに

もしてこかうの跡を今一度みたてまつる

事もやとすること、なくつねはさんたい

せられけりこかうの殿のおはしけるつほま

ねのへんかなたこなたへた、すみありき

もしも御すかたなり共みたてまつらほ

しくおほしめし給ひけれともこかうの

殿はわか身君へめされまいらせぬる

うへは少しやういかに申すともこと葉を

もかはすへからすとつての情をたにも

かけられす

〔3ウ〕

少しやうもしやと一首の歌をよふてこ

かうの殿のましくけるつほねのみすのう

ちへそなけ入給ひける

おもひかね心はそらにみちのくの

ちかのしほかまちかきかひなし

小督のとは御らんしてやかて返事

〔4オ〕

もせまほしうはおもはれとも君の

御ため御うしろめたしとやおもはれけん手

にたにとりても見給はすやかて上わらはに

とらせてつほのうちへそなけ出さる少

しやうなさけなううらめしけれともさ

すか人もこそみれと空おそろしくおもひ

給ひていそきとりてふところに入

て出られけるかなを立かへり

玉つさをいまは手にたにとらしとや

さこそこ、ろにおもひすつとも

くれなるに涙のいろも成にけり

かはるは人のこ、ろのみかは

〔5オ〕

今はこの世にてあひみん事もかたければ

いきでいてとにかくに人をとひしと

おもひくらさんよりはた、しなんとのみ

ねかはれける清盛入道しやう国このよ

しをつたへき、給ひてつくくとしあ

んし給ふに中宮と申すも御むすめれい

〔5ウ〕

せんの少しやうも又むこになり小督の殿に
二人のむこをとられては世の中よかるまし
いかにもして小督の殿をめしおひてうしな
はんとその給ひけるか、りけるところに小
督の殿このよしき、給ひてわか身の上はとも
かくもなりなん君の御ため御心くるしと
おもはれけれ

〔6オ〕

別路の草葉をわけんたひころも

たつよりかねてぬる、袖かな

とゑひしつほねの柱にかきつけある夜た
いりをはうちまきれいて、ゆくゑもしら
すそうせられける主上このよし御らんして
御なけきなのめならすひるはよるのおと
とにのみ入せ給ひて御なみたしつませ
おはしますよるは南殿にしゆつきよなり
て月の光を御らんして

〔6ウ〕

心にもあらぬ月をみし哉

〔7オ〕

秋の夜の月にこゝろのあくかかれて
雲るに物をおもふころ哉

とうちなかめてなくさませましましける
きよ盛入道しやう国はこのよしうけたま
はつてさては君は小督ゆへにおほしめし
しつませ給ひけん也ざらにとりては御かい
しやくの女房たちをもまいらせられす
さんたいし給ふ人くもそねまれければ
入道のけんいには、かつてまいりかよふ
臣下もなし男女うちひそめて禁中

〔7ウ〕

いまくしうそみえたりけるころは八月十
日あまりの事なれはさしもくまなき
空なれとも主上はおもひにたえかね御
涙にくもらせ給ひてさやけき月のひ
かりもおほるにして御らんせられける
ひころはしい歌くわんけんさまくの御ゆ
うらんありしかともた、ひとりつくくと

〔8オ〕

涙さへ出にしかたをなかめつ、

おはしましけるや、しんかうにおよんで人やあるくとめされけれども御いらへ申ものもなし

〔8ウ〕

恋詫てひとりふせやに夜もすから
おつる涙やをとなしの瀧

や、ありてたんしやうの大ひつ仲国そのよ
おりしも御とのゐにまいつてはるかにほ

〔9オ〕

ととをく候ひけるか仲国これに候と御
いらへ申たてまつるなんちかふまいれ
おほせくたさるへきむねありと仰せ

これは何事やらんと思ひたてまつり
御まへちかふそ参しけりなんちもしこ

〔9ウ〕

かうか行衛やしりて侍らはありのま、
に申せと仰せければいかてかしりまいらせ
候へきと申上けりまことやこかうはさかのへ
んかたあり戸かやしたる内にあると申す
もの、有そとあるしか名をはしらす共たつ
ねてまいらせてんやと仰せければ仲国う

け給りあるしのなをしりまいらせてはい

〔10オ〕

かてか尋あひまいらせ候へきと申ければ主
上げにもとて御涙せきあへさせまします
そのときなか国御有さまをみたてまつり
ともにあわれをもよほしたてまつりし也

涙のひまよりもつくくものをあんするに
まことやこかうのとはこと引たまひしそかし
これほと月のさやかなるに君の御事思

〔10ウ〕

ひいてまいらせてことひき給はぬ事はよも
あらしたいりにてこと引たまひし時なか国ふ
えのやくにめされまいらせしかは小督の殿の
ことの音はいづくにてもき、ちかへは申まし
さかのけさをいく程かあるへしうちまはつてた

〔11オ〕

つね申さんにはなとか聞出さてはあるへきとお
もひつ、さ候は、あるしかなはそんなし申
さすともすいふんたつねまいらせ候へきた
とひたつねあひまいらせ候とも御書なと候は
すはうわのそらとやおほしめされ候はん

すらん御書を給はり候へまいり候はんと

「(11ウ)

申あければしゆしゃうけにもとてやかて

御書あそはしてそくたされけるすなはち

りやうの御馬にのりてゆけと仰せければ

なかりやうの御馬給つてもち月にむ

ちをあけにしをさしてそあゆませけるほ

とに廣澤の池のみきはにつきしかはく

「(12オ)

まなき月おもしろく見え侍りければ

行駒にかけをならへて廣澤の

池のおもての月そさへけし

とうちなかめゆくほとにをしかなくこの山

里と詠じけんさかのあたりの秋のころさこそ

は哀にもおほえけめかたおりとしたる家を

「(12ウ)

見付ては此うちにもやおはすらんとひかへく

き、けれどもことひくところはなかりけりた、し

御堂などへもまいり給へる事もやあるらん

としやかたうをはしめてたうくをみまわ

れとも小督の殿ににたる女房たにもなかり

けりこはいかにいか、はせんむなしくまかりかへ」

りたらんは君の御なけきいよくまさりなかく

まいらさらんよりあしかるへしこれよりいつく

へもまよひ行はやとは思へ共いつくをかわう

地ならぬ身をかくすへきやともなしとや

せんかくやとたれにとふへき人もなしあん

しわつらふてしはしと、まりいたりしあり

「(13ウ)

さまはかのもろこしのやうきひのこんはくを

たつねかねたるありさまにもことならずや

つらくものをあんするにまことやほうりんは

程ちかければ月のひかりにさそはれてまい

り玉へる事もやとそなたへむひてそあく

かれけるところに龜山のあたりちかく松

「(14オ)

の有かたにかすかにことそ聞えけるみねの

嵐か松風かたつぬる人のことのかかおほ

つかなくはおもへとも行てみはやとおもひ

つ、こまをはやめて行程にかたおり戸

したるうちにことをそひきすまされ

たるひかへてこれを聞ければいかてかき、は

〔14ウ〕

たかへし少もまかふところもなく小かうの
殿のつまおと也かくはなにそとき、ければ

おつとおもふてこふとよむ想夫恋といふかく
なりけり仲国よくくき、まいらせてされはこそ

君の御事おもひいたし給ひてかくこそ

おほえけれこのかくを引給ふ事のやさし

〔15オ〕

さよと思ひこしよりやうてうぬきいたしち

つとならひてかとをほとくとた、けはこと

をはやかてひきやみたまひぬ

〔15ウ〕

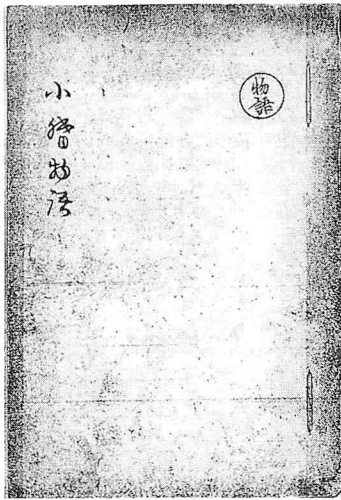
此の小督物語は上巻はかりなり零本といへども
写しおきぬ他日全本を得たらん時はまた参
考ともならんとおもへはなり

大正六年五月

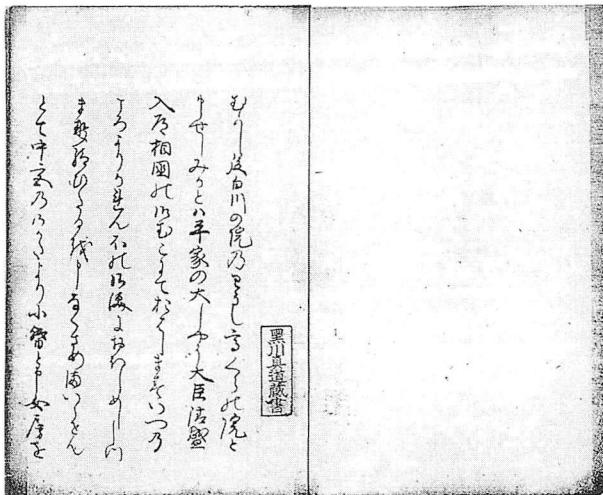
黒川真道識

〔後見返し〕

〔後表紙〕



(前表紙)



(前見返し)

(一才)

<p>まじきまじきうもこれ女房より松町の 中納言のつらきやこれぞその昔年 一れもいんまのなまこの上のいんま まじけるまんせいのなまこふらふや れまじけるまじきやまじきや まじきまじきまじきまじきまじき</p>	<p>まじきまじきまじきまじきまじき の敷乃こつとくしるのくまこまこま りまじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき</p>
--	--

(一ウ)

(二オ)

<p>や抽てついでして何あつて空のい何 まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき</p>	<p>まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき まじきまじきまじきまじきまじき</p>
---	--

(二ウ)

(三オ)

とーまらそんがうまふとまうつが
一くおわめしほゆけきここまの
版のわうがまへめまれのつゆめ
うんかやういふまゆまゆまゆま
もまらまへうまそこまのゆまゆま
うまゆまゆま

(三ウ)

かやうと一音此字とまゆまゆ
この版れまゆまゆまゆまゆま
うまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆま

(四オ)

まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
ゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま

(四ウ)

ゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま
まゆまゆまゆまゆまゆまゆま

(五オ)

<p>せんのかやうも文のたなりお登の登よ 二人のむととてわけて世の中より いふもてお登の登よあおひて りんともおのけあうりけりてあふ 登の登よりさくおのてさくおの上にも かきなりうん君代けりあはんて</p>	<p>今らの世もしつひのしんまもさけ いさくくくためた人さきひと おのてさんよりいさくさんとの ねがられける流整入道一やまのよ 一きほえさくあひてほいさく 人ぬふし申えさくまも御おまお</p>
---	--

(六オ)

(五ウ)

<p>はまけきあめさくそのさふあれた とふのて入せおのておさくさく おくままするる事登よあめさく て月代まをくらんて 候きあたりさくさくさく ふさくわ月さくさく</p>	<p>おのてけ 別後れさくさくさくさく さくさくさくさくさく やまのしつひの種よりさくさく いさくさくさくさくさく さくさくさくさくさくさく</p>
--	--

(七オ)

(六ウ)

<p>とことくひひけの仲をいれふと いへりてまつつて人ちうぶま けりせくはさるゝいひ何りと作を けり何事やんと思ひてまつり けりてふそ事りりさんち くさり者やまつて作をいひけり</p>	<p>ふれと作をいひてまつりけり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり</p>
--	---

(九ウ)

(十オ)

<p>つてつあひのいせりやさるや 上けりては後やれいせりけり ふのれさのいひてまつり ともあひをれさるや 後のはりやいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり</p>	<p>いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり いひてまつりけりいひてまつり</p>
---	--

(十ウ)

(十一オ)

<p> りしん、君はひさききつし、はなはた まはさしん、ひさききつし、はなはた はなはた、ひさききつし、はなはた 地をぬき、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき </p>	<p> せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき </p>
--	--

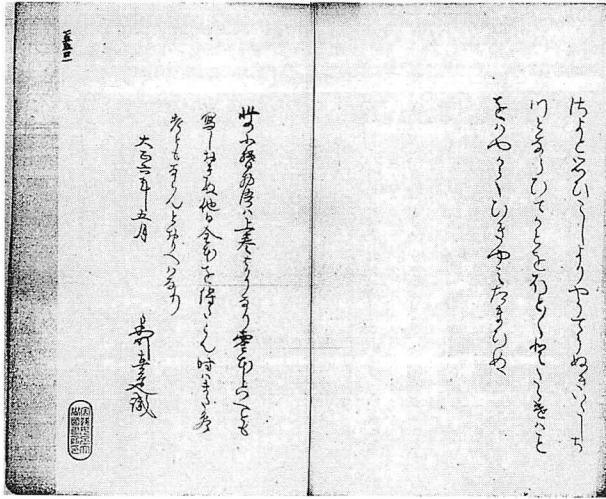
(十三ウ)

(十四オ)

<p> せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき </p>	<p> せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき せん、かきかき、かきかき、かきかき </p>
---	---

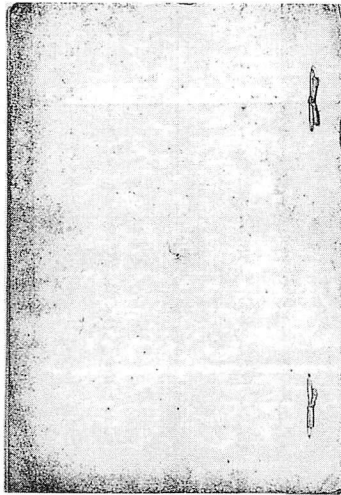
(十四ウ)

(十五オ)



(十五ウ)

(後見返し)



(後表紙)